

令和 2 年 6 月 30 日現在

機関番号：24301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02272

研究課題名（和文）ローマを訪れた北方芸術家の人的ネットワークに関する研究

研究課題名（英文）Study on the human networks of the Northern painters in Rome

研究代表者

深谷 訓子（Fukaya, Michiko）

京都市立芸術大学・美術学部 / 美術研究科・准教授

研究者番号：30433379

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：北方画家のローマにおける活動を、作品に加えて人的ネットワークからも具体的に明らかにすることを試みた。まず1580-1630年頃の全体像（概観）を得た。そのうえで重点対象としたユトレヒト・カラヴァジストのうち2名に関して、彼らのローマにおける最初のパトロンがスペイン人だったことを指摘し、北方出身の若き画家が親スペイン派のネットワークに接近したルートを明らかにするため、注文の背景に関する綿密な調査を行った。その結果、跣足カルメル会とのコネクションや、教皇に仕えた建築家ジョヴァンニ・ヴァサンツィオとのコネクションなど、一定の説を提示するに至り、その内容をオランダで開催された国際学会で発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で行った複数のケーススタディにより、17世紀前半の北方画家のローマにおける人的ネットワークと作品制作との関連性を具体的に明らかにすることができた。特にユトレヒト・カラヴァジストと呼ばれる画家たちと親スペイン派の人脈との関係性に着目した事例では、重要な要因として、当時のローマの国際性と母国での人間関係の保持という両側面を浮き彫りにした。また、それとは異なりローマでの同居関係が作風上の影響関係につながったケースも見出された。美術史研究においては、具体的な事例に即して作品に影響しうる要因を確定していくことが重要であり、そうした意味で有用なデータを蓄積することができたと考えている。

研究成果の概要（英文）：The research aims at obtaining the clearer image concerning how artists from the Netherlands were active in Rome from the viewpoint of their networking in addition to their works. First, the survey to gain a general perspective from 1580 to 1630 has been done. Case studies followed which investigated the activities of Utrecht Caravaggisti, of which two artists have acquired the church-related commissions in Rome, and their first patron in Rome were Spaniards. Research into the background of the commissions and the connections with the important patrons has resulted in a certain hypothesis, which has been presented in an international conference held in the Netherlands.

研究分野：西洋美術史

キーワード：バロック オランダ美術 イタリア美術受容 パトロネージ

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

17世紀初頭には、オランダ・フランドル絵画史に名を残す画家たちがローマを訪れ、同地で作品制作など一定の活動の痕跡を残している。しかしながら帰国後の作品や経歴に比べると、彼らのローマ時代については、推測をもとに形作られたイメージも多く、いまだかなりの不明点が残されている。こうした欠落は、問題の重要度の低さや周縁性を意味するものではない。むしろこの時期の北方芸術家のローマにおける活動や人脈の理解を深めることは、以下の3点の理由により、極めて学術的な意義が大きいと考えられる。

第一に、バロック様式の北方への伝播において、この時期の彼らの活動が無視しえない役割を果たしたという事実がある。ルーベンスについては言を俟つまでもないが、北部ネーデルラントにかんしても、テル・ブリュッヘンらユトレヒト・カラヴァッジストたちの作品がレンブラントらに及ぼした影響が指摘できる。

第二に、近年歴史学の分野で注目を集めている問題でもあるが、ローマにおけるスペインの政治的影響力が、本研究で扱う上述の作家たちの制作を考える上でも重要な要因となりうる。本研究では、親スペイン派の人脈について重点的に考察することで、ローマにおけるスペインの力が、北方の芸術家たちの活動にどの程度まで影響を及ぼしえたのかという点についても明らかにする。

第三に、とくに北部ネーデルラントにおいては、まさにこの頃が、カトリックがいわば失地回復のための再布教に乗り出す時期に当たっているという点である。ローマを訪れ、教会のための宗教画も制作していた、すなわち確実に同地の聖職者たちと直接的なコンタクトをもった画家たちと、そうしたカトリックの聖職者、あるいは有力信者との人脈や関係性については、一度まとまった検討を行う必要と意義があるように思われる。こうした歴史的な意義があることから、本研究の計画を着想した。

### 2. 研究の目的

16世紀以降、北方から数多の芸術家たちがローマを訪れたが、同地での彼らの活動については、作品の様式比較に基づく影響関係の推定が唯一の論拠である場合もいまだ散見される状況である。本研究は特に16世紀末から17世紀の前半に焦点を絞り、とくに不明点の多いこの時期について、パトロンとの関係、芸術家たちの団体への所属、居住地・教区、他分野の専門家との交流の4点を重点項目として、ローマにおける彼らの活動を、人的ネットワークの側面からより確実に理解することを目的とする。それにより美術史上の欠落を埋めるとともに、ローマでの活動において、作品の成立に影響しうる諸条件を明らかにし、ひいては個々の作家像の明確化や、帰国後の作風・図像上の変化をめぐるより十全な理解が得られることを期待する。

### 3. 研究の方法

本研究は二部に分けて遂行していく。ローマを訪れた北方芸術家を可能な限り網羅し、特定の選択項目について情報を集めることで彼らの活動に関する全体像を明確化しようとする全体像(概説)部分と、特に重要な画家たちを重点対象とした多角的な検討部分である。このうち、全体像については二次資料、先行研究等の蓄積を活用して迅速に作業を進め、更なる検討に値する領域の発見に努める。具体的には、ケーススタディ(事例研究)の候補を幾つか洗い出し、それらを重点対象と定めて総合的な研究を行う。重点対象については、オランダ、イタリア両国における文書記録調査、作品実見調査を行い、新出資料や新知見の獲得を目指す。そして最終的に2つの部分を総合することにより、特殊な事例の特権化にも、漫然とした概説にも陥らない、立体的な実情の把握に努める。

### 4. 研究成果

#### (1) 全体像の把握から重点対象の決定まで

まず、T.H.フォッケルやホーヘウエルフなどによる、ローマにおける北方芸術家の活動に関する研究、さらに『ローマのフランドル人(Fiamminghi a Roma)』などの基本文献の情報を再度整理し、1580年頃から1630年頃までの半世紀間の「ローマにおける北方芸術家の活動」に関する全体像を確認した。その過程で、南部ネーデルラント出身者に比べて、北部ネーデルラント出身の芸術家たちがローマで教会関連の注文を獲得することが圧倒的に少なかったという偏りが明らかになってきたため、そうした状況下においてながら教会関連の注文を得ていた北部ネーデルラント出身者、ヘリット・ファン・ホントホルスト、ディルク・ファン・バビューレン、ダーフィット・デ・ハーン、ヘルマン・ファン・スワーネフェルトに着目し、彼らの活動を重点対象(ケーススタディ)として取り上げることにした。また、このうちファン・スワーネフェルトの活動期は前三者にやや遅れ、異なる教皇在位期中であることなどから、まずは時代的に重なっていた前三者を考察対象として進めていくことにした。

また第二の重点対象として、カラヴァッジョ様式の普及に貢献した作家としてよく知られるバルトロメオ・マンフレディと北方画家(特にディルク・ファン・バビューレン)との関係について考察することにした。

## (2) 作品実見調査

まず、当該作家のイタリア時代の作品をリストアップし、実見調査の計画を立て、順次実見調査を行った。また、研究期間中の2016年にはスペインで「カラヴァッジョと北方の画家たち」展が、2019年にはユトレヒトならびにミュンヘンで「カラヴァッジョとヨーロッパ」展が開催され、いずれにおいても本研究で対象とする作家たちの作品が出品されたため、こうした展覧会においても実見調査と資料収集に従事した(2016年8月、2019年2月)。

作品調査では、ローマ市内及び近郊の教会に設置された三作家の作品を検討した。ファン・ホントホルストに関しては、サンタ・マリア・デッラ・ヴィットーリア教会の《第三の天にあげられる聖パウロ》、サンタ・マリア・デッラ・スカラ教会の《聖ヨハネの斬首》、アルバノ・ラツィアーレの《フラミニア・コロナ=ゴンザーガの奉献画》などを実見したほか、ヴィットーリア教会とサンタ・マリア・デッラ・スカラ教会を所有する跣足カルメル会との関係性を探るために、ジェノヴァのカルメル会教会であるサンタンナ教会に彼が制作した《キリストの前の聖女テレサ》を中心に調査した。このジェノヴァでの調査の結果、ホントホルストのモノグラフ等に掲載されている写真ではカット(トリミング)されていた作品最下部のカンヴァスの継ぎ目を確認することができ、これと構図とを考慮に入れると、額に合わせて作品サイズが後から調整されていたことが推測された。こうしたことを元に、制作地や制作年代の前後関係について考察を行った。ディルク・ファン・パビューレン作品についても、サン・ピエトロ・イン・モンテ・リオ教会のピエタ礼拝堂内の作品調査を行ったほか、上述の展覧会の際などに、異なるライティングの下で作品を検分することにより、教会内では確認できなかった細部を知ることができた。こうして、本研究期間以前にすでに実見していた作品と合わせると、研究対象となる作品のほぼ全てについて実見調査を行うことができた(イタリアでの調査時期:2018年9月、2019年9月)。

## (3) 事例研究

上述のような作品調査と並行して、文献調査等を行い、これらの作品群の制作背景や注文に当たった人間関係を探るといった作業に当たった。既に早くから、上記の3人の最初のパトロンがスペイン人だったという事実に行き当たっており(ただし先行研究では、イタリア語化した名前を用いていたこともあってホントホルストのパトロンがスペイン人だったということは明示されていない)、北方出身の画家がローマで最初に行き当たったのがなぜスペインの人脈だったのかということについて、解き明かす必要を感じていた。この疑問には、2つの方向性からアプローチした。

1つ目は、彼らが注文を受けた時点(1610年代)には、まだ北部ネーデルラントのスペインからの独立は確定しておらず、長年にわたる政治的なスペイン・ネーデルラント関係や、スペインにおけるネーデルラント美術愛好という伝統が、こうした注文に繋がった可能性である。これは大きなテーマでもある一方で、先行研究では全体像の提示がまだ十分になされていないと感じられたため、概観的な整理を試みると同時に、このテーマに関する理解を深めるべく、大阪大谷大学の今井澄子氏と共同でRenaissance Society of America(2019年3月)でのセッションを企画し、Historians of Netherlandish Art(HNA)という学会のスポンサード・セッションとしての公認を得て参加し、セッション冒頭の趣旨説明と司会を担当した。また、これに関する研究結果を「ネーデルラント美術とスペイン」という論文(研究ノート)にまとめた。このような活動により、スペインにおけるネーデルラント美術受容という論点についての理解は深まったが、同時に行っていた当時のローマでの社会的慣行の例(例えばスペイン系の慈善施設が、保護の対象とする人々の出身地別の優先順位)などと照らし合わせると、全般的な歴史的関係や出身地をこうした作品注文の直接的な「理由」とするには、やや問題があるようにも思われた。

2点目の方向性は、彼らの注文主をめぐる人間関係を詳細に検討する中で浮かび上がってきたもので、親スペイン派にとって重要だった教皇パウルス5世とその甥シピオーネ・ボルゲーゼに仕えたユトレヒト出身の建築家ジョヴァンニ・ヴァサンツィオ(ヤン・ファン・サンテン)が、同郷の若き画家たちにとって最初のコンタクトになりえた可能性を検討するというものである。これは大いにありえそうなことである一方で、具体的な直接的関係を見出すことは長く困難で、研究の中で最も難航した部分となった。例えば、戦前の研究では、ジョヴァンニ・ヴァサンツィオはユトレヒト出身の画家で、若くしてローマで没したウィレム・ファン・ウェーデという人物のためにサンティ・コスマ・エ・ダミアノ教会に墓碑を用意したということが報じられていたが、同教会での調査では該当する墓碑を見出すことはできなかった。しかし、異なる複数の人物がこの事実を報じていることから、本研究においてはこれを事実として進めることにした。ウィレム・ファン・ウェーデについて分かっていることは少ないが、オランダにおける家系調査の結果、ウィレム・ファン・ウェーデとヴァサンツィオが親戚であること、またヴァサンツィオの妹が後にホントホルストらの師匠であるブルーマールトに世話になるなど、密接な関係にあることが明らかになった。こうした関係性から、ヴァサンツィオの従弟にあたるウィレム・ファン・ウェーデと、彼と同年のホントホルストは、ともにブルーマールトの下で修業をした可能性が高いと推測できる。ウィレム・ファン・ウェーデの没後にホントホルストは跣足カルメル会関連の仕事を複数手がけていくが、跣足カルメル会の勢力拡大とこうした装飾事業には、シピオーネ・ボルゲーゼやヴァサンツィオも関与しており、こうした状況から見ても、ホントホルストのローマにおける最初の公共的な注文は、ヴァサンツィオの影響があって獲得できたものと考

えられるように思われる。

この調査結果と仮説については、2019年12月に「南へ赴く (Going South)」と題された国際シンポジウムで発表し、好意的なフィードバックを多数得ることができた。特にスペイン系の人脈との関係という論点はこれまで完全に見過ごされてきたものとして、今後の研究の発展に資するとの評価を得られた。研究期間の最終段階にちょうどテーマが合致するシンポジウムが開かれ、そこで発表を行うことができたことを幸運に思う。

第二の重点項目についても、カラヴァッジョ様式の普及に貢献したと考えられてきた「マンフレディの方式 (Manfrediana Methodus)」の再検討を行うと同時に、国立西洋美術館が近年購入したマンフレディ作品《キリストの逮捕》を中心とした調査・考察を行うことで、ローマにおける画家同士のハウスシェアや隣人関係と作風の近さという現象について考える素材を得ることができた。これについては論文にまとめ、本務校の紀要に発表した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 深谷訓子	4. 巻 1
2. 論文標題 物語画の構想と「読書」：フィリップス・アンゲル『絵画芸術礼賛』における「実践的な歴史の知識」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都美術史学	6. 最初と最後の頁 65 - 98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 深谷訓子	4. 巻 64
2. 論文標題 洋の東西を繋ぐ船——蘭船絵馬に託された期待	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都市立芸術大学美術学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 61-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 深谷訓子	4. 巻 63
2. 論文標題 〔研究ノート〕ネーデルラント美術とスペイン	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都市立芸術大学美術学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 23 - 35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 深谷訓子	4. 巻 n.a.
2. 論文標題 オランダ紳士たちの優雅なガウン ヤボンセ・ロックと呼ばれた衣裳	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 幸福輝編『オランダ17世紀美術と<アジア>』	6. 最初と最後の頁 245-272
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 深谷訓子	4. 巻 62
2. 論文標題 17世紀初頭のローマにおける宗教画制作の「模倣」と「着想」：カラヴァッジョ、マンフレディ、ファン・パビューレンの《キリストの捕縛》を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 京都市立芸術大学美術学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 73-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 深谷訓子	4. 巻 n.a.
2. 論文標題 書画同源？ オランダと漢字の出会い	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 17世紀オランダ美術の東洋表象研究	6. 最初と最後の頁 59-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Michiko Fukaya	4. 巻 2
2. 論文標題 Connection between Rough Brushstrokes and Vulgar Subjects in Seventeenth Century Netherlandish Paintings	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Kyoto Studies in Art History: Appreciating the Traces of the Artist's Hand	6. 最初と最後の頁 55-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 深谷訓子	4. 巻 33
2. 論文標題 「灯火を譲る」 ネーデルラントの絵画と版画にみる高齢の親と子の関係	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 美術フォーラム21	6. 最初と最後の頁 70-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Michiko Fukaya
2. 発表標題 Spanish Patrons of the Utrecht Caravaggisti in Italy
3. 学会等名 Going South (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Michiko Fukaya
2. 発表標題 Representations of Dutch vessels in Dutch and Japanese Paintings of the 17th and 18th Centuries
3. 学会等名 Netherlandish Art and the World (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Michiko Fukaya
2. 発表標題 Netherlandish Art and Artists in Spain 1400-1600
3. 学会等名 Renaissance Society of America (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Michiko Fukaya
2. 発表標題 An Examination of the Connection between Rough Brushstrokes and Vulgar Subjects in Seventeenth-Century Netherlandish Paintings
3. 学会等名 Kyoto Art History Colloquium (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 深谷訓子
2. 発表標題 書画同源? オランダと漢字の出会い
3. 学会等名 シンポジウム オランダ17世紀美術と アジア (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>アメリカ・ルネサンス学会トロント大会セッション内容  <a href="https://rsa.confex.com/rsa/2019/meetingapp.cgi/Session/1410">https://rsa.confex.com/rsa/2019/meetingapp.cgi/Session/1410</a>          ネーデルラント美術と世界 国際カンファレンスプログラム  <a href="http://www.chineseimpact.nl/2018conference/">http://www.chineseimpact.nl/2018conference/</a></p>
---

6. 研究組織		
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)
		備考